

# 歌人「渡辺よしたか」の生涯と作品（中） — その1 —

野口 周一<sup>a</sup>

<sup>a</sup> 湘北短期大学

## 【キーワード】

台湾 渡辺よしたか 岩水八重 『創作』 渡辺みどり 花蓮港 『雲母』

## 承前

渡辺よしたか（義孝）という歌人がいた。明治31年（1898）に熊本県天草に生まれ、9歳で台湾に渡り、基隆から台南、台中、台北と各地を遍歴した。大正15年（1926）9月に台湾日日新報社員として、同社花蓮港支局の立ち上げとともに同地に赴くや、その暮れに歌会「あぢさゐ」を立ち上げ、昭和2年（1927）4月に『あぢさゐ』を創刊した。しかし戦時体制が進展するなかで、よしたかは同誌の存続を危ぶみ、昭和18年（1942）に斉藤勇の主宰する『台湾』への合併を進めるのであるが、よしたか自身は軍部の横暴による「自爆」として、その悔しさを滲ませている（「自爆の弁」、『台湾』第4巻第6号、昭和18年）。

その後、日本の敗戦により台湾から夫人の郷里・群馬県富岡市に引き揚げ、同地において『あぢさゐ』を復刊した。ときに昭和23年（1948）4月のことであった。そして、昭和58年（1983）1月に逝去するまで歌の道に精進し、『あぢさゐ』は同年2・3月号「渡辺よしたか追悼」をもって廃刊となった。そのとき、それは通巻388号にまで達していた。

---

<連絡先>

野口 周一 noguchi@shohoku.ac.jp

いま、よしたかの戦前期の資料は台湾の大学図書館等にわずかながら残されているにすぎず、遺族もまた敗戦の混乱のなかでの引き揚げを体験し、よしたかの著したすべての書籍を蔵しているわけでない。しかし、それら残された資料を紐解いていくことにより、よしたかの数奇な人生遍歴、戦後の短歌指導における全国行脚、彼にとって短歌は何であったのか、そしてその哲学的思索は宗教的情操にまで昇華されていたといっても過言ではない。

前稿は、資料整理を念頭におきつつ、よしたかの生涯について台湾時代に焦点を絞って再現し、その著作物を収集する作業の経過報告とした。

本稿は、前稿では十分に触れえなかった、その後の調査で判明したことを、岩満千恵、渡辺みどり<sup>(1)</sup>の二人の女性を中心に報告していくことにする。その際の手がかりとなった著作が『新万葉集』であり、『みどり句集』であった。

## 1. 『新万葉集』を糸口にして

### (1) 岩満千恵の歌とその後の人生

『新万葉集』第1巻（改造社、昭和13年（1938））は、前稿においてよしたかと岩満千恵の悲劇的な別れの後、よしたかが千恵の歌とその後の消息を知り

えたものであった。

まず歌4首をあげ(324-325頁)、便宜的に①から④を付す。

悩みぬき苦しみとほしおのづからある安けさに今は居りつつ ……………①

夫大連に赴任 一首

蔓草のよりどころなき独りして家を守るに疲れむとすも ……………②

君と在りてひまなく事に追はれつつおみなご吾の心足らふも ……………③

心をば傾けつくし君を思ふこの性ゆゑに苦しみて来し ……………④

経歴には「大正六年四月同郷出身の岩満重に嫁し夫の任地に行く。大正十二年頃より和歌に興味を有し独学にて斯道に精進、昭和五年より『創作』に岩水八重の名にて毎月投稿、昭和十一年十一月二十三日大連にて死去。四十一歳」(495頁)とある。

『創作』は若山牧水が創めた歌誌である。そこに「岩水八重」の名にて、昭和5年(1930)すなわち『創作』第18巻より投稿とあるので、それを検索していきたい(日本近代文学館蔵)。しかしながら、発見しえた歌は②、③と④であり、①は未だに発見できていない。以下、②～④を発表時期の順に(a)～(c)として述べ、さらに若干のことどもを(d)～(e)として付記することにしたい。

(a)「心をば傾けつくし君を思ふこの性ゆゑに苦しみて来し」

この歌は昭和7年(第20巻)4月号に、大悟法利雄<sup>(2)</sup>の選で「創作詠草」欄に、「岩水八重子」名で6首掲載されている、最初の5首連作のうちの4首目である。他の4首は

鶏の雛は可愛し手に入れてお餅のやうにまろめたきかも  
可愛しと見てゐるほどにいつとなくこのひよこらは喧嘩始めぬ

勧められクラブを取りて一かどのゴルファーらしく身がまへて見る  
いとし子の事を語りて美しきこのまろうどはさらにかがやく

であり、標記の歌との関連は読み取れないが、「苦しみて来し」から、よしたかとの恋愛を回想していたことはわかる。これに関わる歌と思われるものが、昭和10年(第23巻)5月号にある。

いちづには勧められざり自らの歩みし道に思ひ至れば

この歌の前に、

あらためて自らの年の思はるれ頼まるるは皆縁談のこと

とあり、これとの関係を考えて「勧められざり」は「勧められざり」であろう。

なお千恵には、よしたかとの苦悩の日々を相談できる友が存在していたようである。これは後述したい。

最後の6首目は「二科の重鎮有島生馬氏来台逢ひて一首」の詞書のもとに、

さりげなく語り給へどしかすがに一つの道を究めたる君

とあり、千恵がその当時も台湾に在住していたことがわかる。

(b)「蔓草のよりどころなき独りして家を守るに疲れむとすも」

この歌は昭和9年(第22巻)10月号に、大悟法利雄の選で「創作詠草」欄に、「岩水八重(東京)」名で掲載されている。

千恵の夫・重は台湾で退官を余儀なくされたのである。『創作』昭和7年6月号には「岩水八重子(台北)」で掲載され、2ヵ月後の8月号に大悟法利雄の選で「岩水八重子(東京)」で(このときから投稿者名のあとに、その居住地が記されるようになった)、退官の経緯が4首語られている。

退官の余儀なき事を諄々と説きます君の静か

なる声  
いかばかりか口惜しからむいささかも動ぜぬ  
君の頼もしきかな  
愛惜のころは深し住みにくき島と日ごろは  
疎み来つるに  
ルンペンの心境を語り朗らかに笑へば客の皆  
驚ける

同7年12月号には、

雨の日は夫も侘びしきか居間よりは仄かに香  
の匂ひ流れ来

とあり、昭和8年（第21巻）3月号には、

はしための無きくらしにも漸うに慣れて水仕  
のわざも苦にならず  
一合の酒を愉しむ夫の為夕餉の支度おろそか  
にせず  
自づから喜びもありよそ見には侘びしと見え  
むわが生活にも

とあり、ようやく退官した夫との生活にも慣れた  
安らかさとささやかな幸福感が見て取れる。

また同年4月号には、

有閑夫人よと嗤ひし人に今のこの忙しさをば  
見せてやり度き

同年5月号には

つぎつぎに仕上がりにてゆく楽しさに疲れも知  
らで針運び居り

とあり、お嬢様育ちで高官夫人となり—よしたか  
自身は「某子爵の息女であり高官夫人であった」  
という（『最高の価値と最大の幸福』あぢさゐ社、  
昭和24年〈1949〉、112頁）、生活の細々したこと  
には手を触れなかった千恵の歩みが歌われている<sup>(3)</sup>。同年9月号には、

このままに朽ち果つるべき運命と意地にも良  
人は思はざるべし  
むざむざと働き盛りを遊び暮らす不運をつひ  
ぞ思ひ見ざりし

とあり、夫の再就職の道への焦慮が見られる。

そのおおよそ一年後に、重は大連に赴任する  
のである。戦後、重は鹿児島県川内市長を二期務  
め、「文化市長」と称えられた（『鹿児島県姓氏家  
系大辞典』〈角川日本姓氏歴史人物大辞典 46〉角  
川書店、平成6年〈1994〉、337頁）。戦前期の動向  
としては「大正四年東京帝国大学法科法律学科卒  
業、弁護士試験に合格している。翌五年八月台湾  
総督府に入り、台北庁事務官、台湾総督府州理事  
官、同事務官などを経て、昭和六年九月台北州庁  
内務部長に進み、翌七年四月退官。弁護士を開業。  
十四年から二十一年まで新潟市助役をつとめた」  
と記されている（『日本の歴代市長』第三巻、歴代  
知事編纂会、昭和60年〈1985〉、750頁）。ここから  
重が昭和7年（1932）4月に退官<sup>(4)</sup>したことは、千  
恵の歌にも符合する。しかし、大連のことは触れ  
られていない。

千恵の歌は、昭和10年（第23巻）8月号に、「大  
連行」の詞書のもとに7首掲載される。この大連  
行は旅行であった。その冒頭の歌は、

独り旅の吾を案じてる給はむ別れ来し母のし  
きりにこひし

である。その他の3首、

暖かき国に生れて育ちたる吾に珍しきアカシ  
アの並木

英国風の建物の洪さと重味とを幾度とも言ひ  
つつ歩みゆく良人

アカシアの葉隠れに見えてしつとりと落付き  
のある家は見あかず

ここには重が再就職し、然るべき邸宅に住む誇ら  
しさが感じられる。

その後千恵は東京に帰り、昭和11年（第24巻）  
2月号には「離り住む夫の誕生日に」として、

弟妹達集り卓をかこめども足らはぬ思ひは同  
じなるべし

とあり、同年5月号には大悟法利雄の選で、「岫雲  
集」に11首採られている。そのうち、最後の3首

は「離り住む良人へ」と題して、

今はある心易さを君も吾も楽しめるらしひとり  
りに慣れ  
不自由を言ひ給はねば吾もまた寂しと書くは  
憚られつつ  
思ひあまる事を告ぐべき人なくて事毎にわが  
嘆き深けれ

これには(評)が付され、「最後の三首、大いによろし」とある。

(c)「君と在りてひまなく事に追はれつつおみな  
ご吾の心足らふも」

この歌は昭和11年10月号、「岫雲集」に大悟法  
利雄により採られたものである。このときは、6  
首選ばれている。他の5首は、

残さるる猫を哀しみ自らの寂しさはつひに言  
ひまさぬ母(旅愁)  
張りつめし心ゆるむも長旅を終へてひさびさ  
に夫に向へば  
スキッチを入るればラヂオは耳慣れぬ満語  
ニュースなりさらに寂しき  
ぼつねんとみ給はむ母よ遠く来しわが寂しさ  
はさらに深きを  
仮住みに心たやすくなじまねば離れ来し家の  
ただに恋しき

である。掲載時期の2カ月前ころであろうか、夫  
のいる大連に向って2度目の旅に出て、しばらく  
滞在するのである。以後は大連からの投稿であり、  
同年11月号には、

覚束無き日本語使ふ満人のボーイに吾は満語  
習ふも  
泣く子をば未だも叱る満人の女の声の高く鋭  
し

とある。同年12月号には、

咲ききほひほしいままなり秋草は折る人の無  
きこの山道に  
指さして夫が教ふる街々の名もきき取れず風

に紛れて

とあり、昭和12年(第25巻)1月号には、  
所在なさに畳の上を一廻り歩み見るかも日の  
昏るころ  
語るべき人はいまさず良き映画見ていそいと  
帰り来つるに

とあり、千恵は夫のいる大連に滞在するものの、  
東京に残してきた母と家と猫のことをしきりに思  
い出すのである。その寂しさは何に起因していた  
のであろうか。

その1月号の消息欄に突如「岩水八重氏 十一  
月二十三日長逝さる。謹んで哀悼す」(84頁)と訃  
報が掲載されているのである。

千恵はいつ病んだのであろうか。病状の進行を  
窺わせる寂しい歌が続いていたのである。

\* \* \*

猫の歌は、昭和11年6月号に、

名を呼べばまるきまなこを細めつつ甘え鳴き  
すも愛し仔猫は

とあり、家の歌は数多くあり、昭和8年12月号に  
は「新居」と題して、

晴れし日は坐りながらに富士も見ゆ空家と畑  
に囲まれし家  
不器用な手つきにシャベル使ひある良人の姿  
に笑ひとまらず  
拭き上げて見るに楽しみも縁側のやうやう洪き  
つやを帯び来ぬ

とあり、新しい家への愛着、夫との仲睦まじさが  
浮かんでくる。

なお、千恵は映画や舞踊を好んで鑑賞したよう  
である。昭和7年12月号には、

妖しくもガルボが演ずるマタハリに心自づから  
昂まりて来る  
年若き従妹とともに途すがらガルボを讀え帰  
り来にけり

とある。昭和9年7月号に「映画、にんじん」<sup>(5)</sup>と



題して、

にんじんに扮せる少年俳優の心憎き迄自然なる演技

見に来たる甲斐ありしよと映画嫌いの良人も感銘深き面持

とある。昭和10年5月号には「映画未完成交響楽」と題して、

弾きやめて笑ひ声のせし一隅をぐつとにらめるシウベルトの顔

とあり、選者の大悟法利雄も「未完成交響楽は我也見て歌ごころをばそそられて来ぬ」と評している。

昭和10年2月号には「サカロフ夫妻の舞踊を見てのち久しく印象消えざれば」として、

目つむれば今見し如くひとつひとつの踊りのポーズ描き出さるる

とあり、同年4月号には「誘はるるままに人気の焦点となれるターキーを見にゆく」として、

サイン乞ふ乙女等ならむ楽屋口とおぼしき所に群れて立てるは

ターキーとオリエ花道を出で来れば満員の場内さつとどよめく

乙女等のあたり憚からぬ嘆声にしばしば驚く吾とわが友

という歌もある。

また煙草を嗜み、昭和8年8月号には、

ゆつくりと一本の煙草を喫ひ終りぬかるる愉しさも久し振りなり

同年12月号には、

せはしさに変りはなけれ君の留守は所在なきにや煙草のみ喫ふ

とある。

(d)「良人と共に在る喜びに淋しさもありと告げなば咎め給はむ」

さて、④の歌からも千恵はかつてよしたかとの恋愛に懊悩したことが偲ばれる。その千恵には、

その苦悩を相談していた友の存在があった。それは昭和7年2月号の「友に」と題した、標記の「良人と共に在る喜びに淋しさもありと告げなば咎め給はむ」という歌から窺い知れる。

また同年6月号には、

文学を映画を語りこの若き友の才気はほしいままなる

おきまりの社交辞令に慣らされし身に有りかたき友の文かな

身に余る日頃の憂さをこまごまとこの友にこそ言ひ送るべき

同年12月号には、

つれなしと思ひし友の言の葉に籠れるまこと今にして知る

昭和10年1月号には、

吾も問はず友も語らずありきりたりの世間話につひに終りぬ

とあり、長きにわたる友情の深さを窺わせる。

(e)「残さるる猫を哀しみ自らの寂しさはつひに言ひまさぬ母(旅愁)」(既出)

千恵の歌が「岫雲集」欄に掲載されたことは5度ある。1度目は昭和7年10月号に7首、2度目は同10年9月号に6首、3度目は同11年3月号に6首、4度目は同11年5月号に11首、5度目は同10月号に6首、それぞれ採られた。標記の歌は、5度目の選に入った際の冒頭のものである。

ここでは、千恵の歌の師である大悟法利雄と離れ住む夫・重を詠った11年5月号の表紙絵と掲載頁を次頁に掲げることにする【図版1・2】。それでは、「岫雲集」欄に掲載されることの意味は何か。千恵の歌の選にあたった大悟法利雄は「選後に」として、自ら「今月は私の選からは岫雲集に一人も入れなかった。他の選者諸氏が詠草四五人に一人位の割合で岫雲集欄に入れてゐるのに較べると、どうも私の選はちとから過ぎるやうだ。しかし私は諸君の力をもち高く評価したい。今月



などの此の出来を諸君のほんたうの力だと思ひた  
くない。諸君は当然もっといい歌が出来る筈だ。  
そして出来さへよければ私は喜んで何人でも岫  
雲集に入れよう」と語っている（昭和8年4月号、  
100頁）。

千恵は昭和5年（第18巻）から毎月投稿したと  
いうものの、その年は全く採られなかった。昭和  
6年（第19巻）8月号から、「創作詠草」にはほぼ毎  
回選ばれ、評を付されることも多くなり、千恵の  
足取りのほどが窺い知れる。以下、その際の歌を  
幾首かあげていく。なお選者名を明記していない  
ものは大悟法利雄の選である。

ひととせを永劫のごとくも嘆きしが今こそ人  
を迎へんとする（良人の帰朝）

こまごまと帰る日の事かきつらね夫の文にも  
嬉しさは見ゆ

については、「第二首目よし」とあり（昭和6年8  
月号、神原克重<sup>(6)</sup>選）、

別れ居の夫の誕生日を祝はむとくさぐさのも  
の買ひ求めたり

共にゐて祝はばと思ふ淋しさもいつか薄らぐ  
楽しきまどる

など計7首が選ばれ、（評）には「みな相当の出来」  
とある（昭和6年11月号）。

幼な子がうち捨てゆきし團栗の小さき独楽を  
廻し見るかも

かそかなる独楽の唸りの快さに廻しつづけて  
厭くとしもなき

など4首については、「もつとたくさん見せていた  
だきし」とあり（昭和6年12月号）、

かくばかり老い給へども気丈なる母にませば  
と思ひ直しつ

船と陸を乱れ流るるとりどりのテープの綾の  
美しさはも

については、「整つてはゐるが、もつと力強いとこ  
ろがあつて欲しい」とあり（昭和7年1月号）、

なにかよき言葉を君にかけたしよ朝の化粧を  
終へしすがしき

思はぬにかろきざれごと君に言ひともに笑ひ  
て心足らひぬ

については、「飛躍を待つ」とあり（昭和7年2月  
号）、

吾にかへりまづ驚きぬ正月もはや七日としな  
りてゐるなり

自らを顧るなく重ねたる齡しみじみ思はるる  
かも

については、「多く読み多く作りよき素質を更  
にはぐくみ培つていただきたい」とあり（昭和7年3  
月号）、

文学を映画を語りこの若き友の才気はほしい  
ままとなる

おきまりの社交辞令に慣らされし身に有りが  
たき友の文かな

については、「もつとどしどしお作りになつては  
いかが」とあり（昭和7年6月号）、

都にある吾等の上にも苦しみは絶えずと姑に  
は告げ難きかも

については、「も少し沢山拝見したし」とある（昭  
和8年8月号、三苦守西<sup>(7)</sup>選）。

しかし、昭和9年6月号では4首選ばれたものの、  
蕾ややふくらみはすれなかなかに咲かぬ椿を  
待ちあぐみ居り

やうやうに咲きし椿は時ならぬ雪に脆くも崩  
れ落ちけり

産気づける猫を気にしつづ眠りしが朝見れば  
無事に産みてゐるなり

垣根にと植ゑし榎も未だのびず整はぬ庭に欲  
しき木の多き

大悟法利雄は「猫の歌、上野の桜の歌等は殆んど  
皆、単なる説明にしかなつてゐなかつた。最後の  
一首のやうな落ちつきのある歌が見たい」と評し  
ている。



秋更けて已に黄ばめる葉のもとに咲きし朝が  
ほは只一つなれ  
耳澄ませばとぎれとぎれの虫の声嵐の音のひ  
まひまに聞こゆ  
鬱陶しと時に疎みし庭つづきの竹やぶの竹今  
日はきらるる

夫の留守

をとこげの無き気易さに朝々の身仕舞もいつ  
か怠りてゐし  
心ゆるび散らせるままの客間をばたまたまの  
客に愧ぢてゐるなり  
ひつそりと向ひ居りつつ時折に母と話すは夫  
の上なれ

については、「六首共全部採れた。この調子をゆる  
めず次々に見せていただきたい」との評に成長す  
るのである(昭和9年12月号)。

そして、この確かな歩みが昭和10年、11年と「岫  
雲集」欄に4度選ばれることに結実するのである。

## (2) 『あぢさゐ』会員の投稿

当時、台湾を代表する結社と目されていたあら  
たま社は、『あらたま』を通じて、『新万葉集』へ会  
員が積極的に投稿することを呼びかけていた。そ  
の結果は、同書の此処彼処に反映されている。

一方、よしたかには投稿を奨励した様子が全く  
見られない。その理由として考えられることは、  
前稿で既に述べた。すなわち、『あぢさゐ』創刊10  
周年を期し、歌集『あけぼの』が刊行され、その紹  
介が『あらたま』第15巻第9号に、無署名記事な  
がら「台湾東部に熱心に勉強してゐる渡辺よした  
か氏の率ゆる『あぢさゐ』の十年記念刊行である。  
全然歌壇外に閉塞して十年、これまでに仕上げた  
努力は尊敬さるべきだと思ふ。作品も甚だ地味で  
好感を受けるのである」(「新刊覚書」)と書かれて  
いるのである。

その「歌壇外に閉塞」という個所について、『あ

らたま』の創刊者である浜口正雄<sup>(8)</sup>は「渡辺さん  
が『あぢさゐ』を外部に出さないといふ意図がよ  
く分かるやうな気がする。自分と手を繋ぐ者を、  
現今の歌壇の悪風潮に染まらしたくないといふ、  
一<sup>マ</sup>函さからこういふ拳に出てゐるものと思はれ  
る」と好意的に述べているのである(『あぢさゐ』第  
10巻6月号)。

確かに、よしたかを筆頭に幹部連の歌は全く見  
えない。その幹部連とは、第1期(昭和5～6年)  
として、瓜生英彦、門馬つねすけ、藤田木蓮、加藤  
白露(この4名は四天王と称された)、山崎よしず  
み、若林政記、三宅邦彦、第2期として平井三恭、  
藤井重雄、宮竹鈴雄、酒井宣行、阿部烏秋、中本久  
雄、中村勝興、三島哲夫といった面々である(渡  
辺よしたか「回顧三十年」『あぢさゐ』第30巻第9  
号、昭和30年〈1955〉)。

私が精査したところ、唯一の例外として、松久  
静江の歌1首が掲載されている(『新万葉集』第7  
巻、昭和13年)。「作者略歴」には、「四十五歳。大  
分県白杵町に生れ、鳥取市江崎町四〇ノ一に現住。  
昭和三年より作歌、台湾花蓮港にて渡辺義孝氏に  
師事、あぢさゐ同人として現在に至る」(414頁)  
とあり、その当時は花蓮港を離れていたことによ  
り、師の方針に縛られることなく投稿したと推測  
される。

その歌は、「機体四十度にかたむきたりしたま  
ゆらに銀翼の光青空に返す」(295頁)である。

## 2. 『みどり句集』を手がかりにして

### (1) 『みどり句集』について

この句集は渡辺よしたかが同棲していたみどりの  
句を編んだものである。台湾大学図書館にその  
複製が収蔵されている。このたび、その影印本を中  
国文化大学日本語文学系・沈美雪准教授から贈ら  
れた。複製であることが真に遺憾であるが、内表紙

には、よしたかの手になる献辞が記されている。

(a) 構成

まず目次を掲げると、

小影と筆跡

昭和二年……くくられて鶏投げられぬ秋日ざし  
……………外二四句

昭和三年……染物す神嘗祭の一と日かな  
……………外五三句

昭和四年……左右の山芭蕉ばかりや行水す  
……………外一八句

昭和五年……末枯も林も丘の陽おもてに  
……………外二八句

昭和六年……駅路は高き樗の落葉かな  
……………外 八句

昭和七年……冬の山雲はなやかに晴れたり  
……………外一一句

昭和八年……干竿にせきれのゐる大雨かな  
……………外二六句

昭和九年……裏簀に秋の初風聞く夜かな  
……………外三四句

昭和十年……しめ切って安き心に吸入器  
……………外二四句

昭和十一年……時雨雲海より野より山に凝る  
……………外三九句

昭和十二年……さわやかに水天遠し防砂林  
……………外六六句

昭和十三年……菊花御紋の燈籠並みて灯湛ふ  
……………外三五句

故人小伝

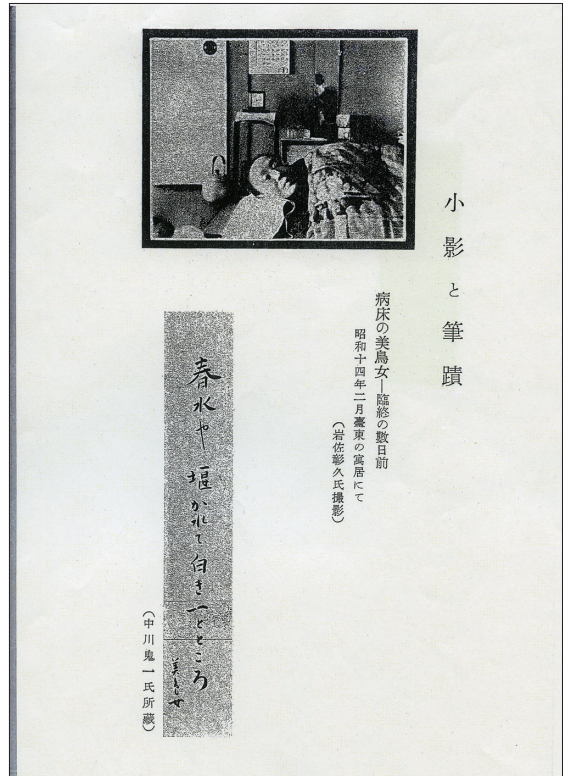
後記

となる。以下、順次解説を加えていく。

「小影と筆跡」には、みどり臨終の数日前という写真がある。撮影は岩佐彰久。筆跡は

春水や堰かれて白き一とところ

という中川鬼一所蔵の短冊が示されている【図版3】。



【図版3】『みどり句集』（発行人 渡辺義孝、昭和15年）冒頭の「小影と筆跡」。

この昭和2年から13年までは、よしたかが花蓮港において『あぢさゐ』を創刊、13年に台東へ転勤、よしたかとともに花蓮港にあった12年間の句作である。なお、この奥付は「昭和十五年九月五日発行」、「発行人 渡辺義孝 台東街台東新町一〇四番戸」、「印刷所 南方商事社」となっている。

(b) 「故人小伝」

「故人小伝」については、全文を記録しておきたい。

\* \* \*

○明治二十年七月九日長崎市に生る。父吉田芳平、母象、父は大阪の人、母は東京、本籍東京浅草千束町にあり。

○明治二十二年十二月妹末美出生、二十五年十一



- 月弟孟芳出生、弟は早稲田理科出、三菱技師長を経て岐阜市高女長、昭和八年五月死去。
- 明治三十四年東京女子師範入学、現鈴木貫太郎大将夫人孝子女史と同級、特に親交あり。
  - 明治三十五年七月十二日父芳平東京にて死去。
  - 明治四十年長野県人青柳三郎氏と結婚渡台、台北に居住。
  - 明治四十二年八月十一日母東京にて死去、母は明治十四年文部省音楽所伝習生として入所、(音楽学校前身)米人メーソン氏に就て音楽を学び明治十六年卒業、長崎男子女子師範中学校等に奉職、当時二女一男をあぐ。次女末美は熊本県人内村亀喜に嫁し、現在台北居住。
  - 明治四十二年十月台北末広小学校奉職中脊髄カリエス発病、台北医院に二ヶ年療養、遂に不治の疾患となる。
  - 大正元年より八年頃まで病氣療養のため三回ほど上京、元年頃より高雄に居住、上京滞在前後三ヶ年位であろう。この間田村俊子その他の女流作家等と交遊作家たらんと志たるも文壇の醜状に嫌悪し翻然意を決し台湾に帰台、不治の廢疾の懊悩を宗教に求めた。
  - 大正十一年青柳三郎氏と離婚、渡辺義孝と同棲、台中に居住。
  - 大正十二年台北に出て、「婦人と家庭」主宰経営、十四年同誌廃刊。
  - 大正十五年九月十九日台北より花蓮港に転居更生の途を求む。以後花蓮港に既存休刊の俳句雑誌「うしほ」復活され、これに拠り古賀山青氏選句の下に俳句に入門、故齊藤東柯氏、「雲母」飯田蛇笏氏に師事、句作に精進、旧来の文学思想はこれに傾注されたる感あり。遂に句に安住を得たるものの如し。
  - 昭和元年渡辺は短歌雑誌「あぢさゐ」を創刊主宰、故人は「うしほ」の編集に専心、昭和十三年十月渡辺台日台東支局に転任となり、十四年一

月十七日花蓮港に愛着を残し台東に赴く。

- 昭和十四年二月十二日死去。五十三歳、法号春光院釋尼妙麗大姉。

\* \* \*

以上より、みどりの前半生とよしたかとの歩みが明瞭になった。私は前稿において、よしたかが台中の山中においてみどりと同棲を始めた時期と、台北に出て『婦人と家庭』の経営・編集に着手した日時とを、仮に大正10年(1921)のこととしたが、本書により前者は同11年(1922)、後者は同12年(1923)のことと訂正せざるをえない。

家族について、みどりの父・吉田芳平は生来病弱で長年患っていたようであり、「父長病なりし幼時追想一句」と題して、

雪解けや幼きものに父病める

とある(『雲母』第14巻〈昭和3年〉第6号)。また弟の吉田孟芳については、岐阜県立海津高等女学校時代に『岐阜県教育』第455号(昭和7年6月30日発行)に、論説「小学校幾何教授に於て重置法証明形式を避くる意見」を発表していることが辛うじてわかる程度である。

#### (c)「後記」

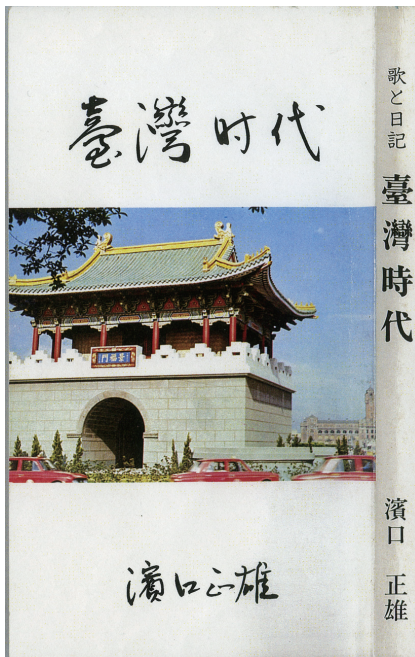
「後記」は、その書き出しを「みどりの長年の闘病生活も、おそらくはもうこれが最後であらうと覚悟して、花蓮港から台東へ転住の荷造りをする時から、自分も発熱して苦痛を堪へながら彼女のため万全をつくしたのであったが、台東に到着すると同時に急変したみどりの容態は絶望の一途を辿り、すでに意識不明の昏睡に墜ちてから約一週間、自分も高熱のため遂に台東病院に入院、四十一度以上の高熱に死線を彷徨したのち、意識を取り戻し、はじめてみどりの死を知ったのであった」と始める(151頁)。これは前稿においては、『あぢさゐ』第13巻2・3月号と後年の「回顧三十年」に拠って記した。

次に「今にして当時を追懐するに、まことに慄

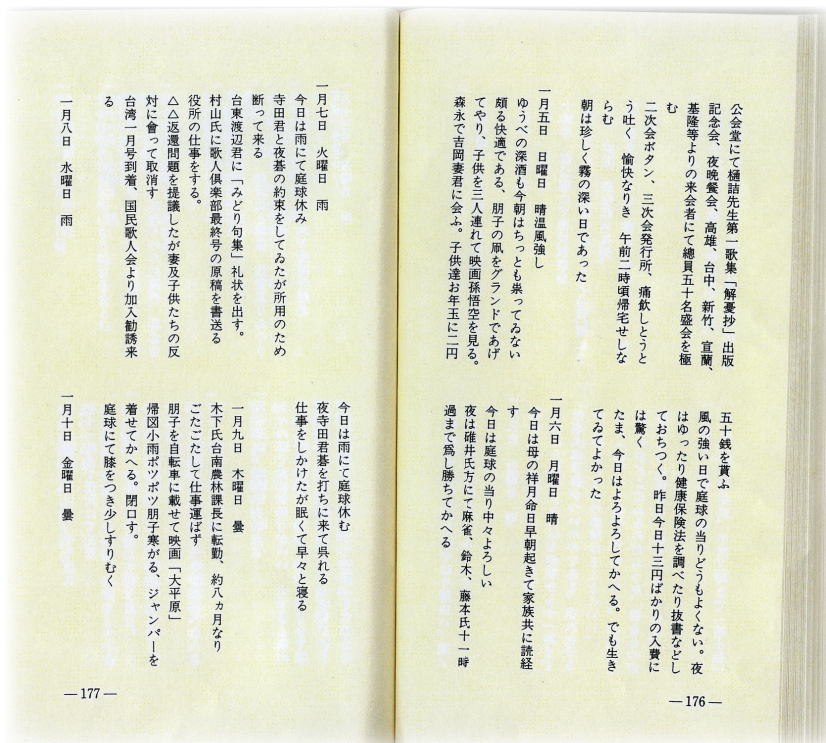
然たる運命を感ずるのであるが、当時まづ自分は人間としてのよりよき更生を考へた」と続くのである。よしたかは何故に「人間としての更生」と考へたのであろうか。顧みるに、みどりを「放擲」して千恵と逃亡を企て、再びみどりととの生活に戻ったときも同様な決意をしていた。これは、よしたかという人間を考へていく際のテーマである。

## (2) 浜口正雄とよしたか

『あらたま』の創刊者・浜口正雄は遺著として日記が残されている。わずか1年分であるが、それが奇しくも昭和16年（1941）、正雄39歳のときのものである。これは正雄の長女・福永玲子氏により『台湾時代』（あすなろ社、平成元年〈1989〉）として印刷に付されている【図版4】。その「一月七日 火曜日 雨」の項に、「台東渡辺君に『みどり句集』礼状を出す」とある【図版5】。よしたかは、前年の暮れか新年早々に知人に贈ったのであろう。



【図版4】台湾の代表的歌誌『あらたま』を創刊した浜口正雄の遺著『台湾時代』（あすなろ社、平成元年）、長女の福永玲子氏が編集。



【図版5】終戦後浜口正雄は台湾に留用され、昭和21年4月6日病死。奇しくも昭和16年、正雄39歳のときの日記が残り、その1月7日の項に「台東渡辺君に『みどり句集』礼状を出す」とある。



前稿で述べたように、正雄は昭和8年6月15日に花蓮港を訪ね、よしたかと歌を詠み、朗詠をやりあい、杯を重ねたのであった。正雄は「渡辺氏には十二年振であらう。あの頃兎角放縦な生活をしてゐたが、今ではすっかり落付いて、岡麓に傾倒し、自分の居を構へて、夫妻楽しく暮らしてゐる姿は羨ましいものに見えた」と記し、「病み妻を常いたはりていと長き年月悔いぬ君にうたれき」と歌ったのである。

正雄夫人・英子氏は現在104歳の長寿を誇りつつ、歌作にも精進される。昨秋、筆者がお訪ねした際にも、「渡辺さんはいつも奥さんをおぶって、どこにでもお連れになられていた」と語られた【図

版6・7】。英子氏の脳裡には、よしたかがみどりを背負いつつ出かける姿が焼きついているのである。

### (3) 江頭梅白の追悼文

花蓮港の俳人・江頭梅白にみどりについての追悼文が『雲母』にあることは、よしたかが自ら「後記」において語っている。みどりの逝去は昭和14年(1939)2月12日、その訃報を伝える『雲母』昭和14年刊行のものは第25巻にあたる。当該巻の所蔵状況は、東京大学総合図書館には6月号と8～12月号、早稲田大学中央図書館には7～12月号、東北学院大学中央図書館には4～12月号、他に山



【図版6】 浜口正雄夫人・英子氏に聴き取りをする著者(平成21年10月17日)。

【図版7】 104歳となった浜口英子氏と長男・透氏(平成22年5月16日)。正雄は長男の誕生を「この男の子まこと男の子と驚きて言ひひをりつ誰にいふとなく」と喜びを表した(『台湾時代』165頁)。英子氏は昭和37年に長福寺幼稚園(横浜市)の開園とともに勤務、透氏と生活をともにする。そのときの歌に「ささやかに膳にのぼりし年のものと食べあひてつつましき春」とある(浜口正雄・英子『渚』私家版、昭和52年、86頁)。



梨県立図書館には10月号のみ、山梨県立文学館には全号が揃っていた。しかし、複写の条件はそれぞれ異なる。

そこで、まず都心の東京大学と早稲田大学所蔵にあたったものの該当誌はなく、東北学院大学所蔵の4月号にあった。然る後に山梨県立図書館、山梨県立文学館にもあたって確認した。以下、全文を記録しておくことにする。

\*                     \*                     \*

**美鳥女史の急逝を悼む**                     江頭梅白

美鳥女が俳句道に精進初められたのは慥か昭和二年頃かと記憶する。花蓮港俳壇を二期に分類するとしたならば第二期の人である。

うしほ誌の雑詠選を蛇笏先生に願い桜紅山青東柯花涯白雉の諸氏に依り東部俳壇の基礎を築かれ、全庁下は固より全島や内地に迄呼びかけて活躍された大正八九年頃より大正末期迄を第一期としたならば、昭和の初期山青氏を選者に迎へ、東柯花涯末生怨迷子其の他女流作家数名を加へ、美鳥女庵を中心に句会や吟行を続けた当時が第二期と言へよう。

美鳥女史を句道に手引きしたのは故東柯である。女史が歩行が出来ず不自由な体の持主である事は蛇笏先生に依り時折誌上に書かれた通り全く不遇な生涯であったのである。

それ丈け俳句道に対する精進振りは他の追従を許さぬ真剣そのもので一年足らずの修業にて雲母誌の冠頭をかち得た人である。其の時の女史の歓喜と感激は一と通りでなく、うしほの消息欄に於て「思へば去りし一ヶ年間私の生活は俳句に依って豊かに恵まれて参りました。それを通しての人間の友情の有難さ常に教へ戒めて此処迄連れて来て下されし東柯さん。お忙しい中を私の句一字一句に御心をとめられ絶えず御斧正と御批判下されし山青さんの純情に恵まれて来た御蔭です」と述べて居られる。

句境の深まるにつれて女史は能く東部台湾独特の句を発表され、郷土の風物を紹介された。

踊場へゆく盛装や椰子の風	美鳥女
そのかみの首狩かぶと月下かな	同
鈴の音や月眉山下に踊るもの	同
舊正の夜のまほらや爆竹す	同
凧あがる狸々木の花のそら	同

之等の句は闘病二十年不遇の人の句とは思へぬ程はつらつとした明朗吟である。病床吟としても、

春を待つ身のしかすかに髪洗ふ	美鳥女
燈籠の房に浮雲流れ添ふ	同
夕焼や十一月の窓ひらく	同
萩むらに小暗き雨や庭潦み	同
甚方神幌につかまり拝みける	同

病苦の跡が見えないのが多い。之れは女史の性格の現はれで男まさりの気性の反映であると思ふ。病苦吟等殆ど見当らない中にも

一日歩行叶ひし夢を見る而して醒むれば起つ術も  
なき不治身なり

これやこのわが即身に夜着かくる         美鳥女  
之等の句に接した時は女史の身上を振り返つて思ふ時同情と愁腸とを呼び起さずに居られないのである。女史は絶体的雲母党で、蛇笏先生への思慕又切なるものがあつた。生前一度御拝眉に接する機会が必ずあると思ひ何よりの希望であり願ひであった様である。

永住の地と定めて居られた花蓮港を離れ台東に赴かれる女史には尽きぬ名残と寂寥とが見受けられた。雲母十二月号に於て女史の入選句に対し白露に金剛の光を感じ、生を悠久の自然風物に仮托して日々を続ける境涯の作家であるとの激賞を蛇笏先生より受けし事や、山青氏よりみどり女史を送るの一文（東台湾新聞所載）に於て郷土詩人としてのあらゆる理解者であつたとの辞に対し駅頭で惜別の時感激の涙をこぼし去られたのである。

最近うしほ句集の編集に専念せられ其の完成を

中途にして他界せられた事は大なる心残であった事と思ふ。然し歌人秋人氏を夫君に持ち心づくしを思ふ存分に受けられ互に文学芸術に理解しあつた女史の一生は不遇の内にも幸福の身であつた。

東柯在世の頃能く女史の枕頭を囲んで作句批評に余念なき頃を思ひ浮べて転た感慨深かきものがある。(二月二十日)

\* \* \*

上記の梅白の追悼文からも、みどりは齋藤東柯を師と仰ぎ、古賀山青、武田花涯、神野未生怨等々の諸先輩に導かれつつ句作を始めたのであった。

東柯はみどりの直接の師であることにより、節を改めたい。

また、「歌人秋人氏を夫君に持ち」とあるように、よしたかも「秋人」と号し句作をともにしたのである。例えば、『雲母』には飯田蛇笏選の「寒夜句三昧」があり、各支社に加えて台湾からは「うしほ社」が参加している。昭和12年の例をあげよう(『雲母』第23巻〈昭和12年〉第4号)。第一夜は1月15日、

うす月の枯野にそよぐものもなし	渡辺 秋人
檻中の鶯に近くて冬さうび	同
パパイヤの下土暗き冬さうび	渡辺美鳥女
枯野路の山裾かけて雨けふる	同

第二夜は1月16日、

みなかみに濃淡かさね山眠る	渡辺 秋人
雨けふる地中に遠し枯木立	渡辺美鳥女

第三夜は1月17日、

みささぎの壕の水さび浮寝鳥	渡辺 秋人
山色は時雨がくりつ移りゆく	渡辺美鳥女

なお、梅白の言う「雲母誌の冠頭をかち得た」こと、蛇笏が「雲母十二月号に於て女史の入選句に対し」「境涯の作家であるとの激賞」のことについても節を改めたい。

#### (4) 齋藤東柯

東柯については、まずよしたかの言がある。「花

蓮港は、台湾でも未開地であったが、中川鬼一が花蓮港の新聞社にみたことがあり、(その当時は台北に来てゐた)彼の師事した俳人齋藤東柯といふ人が東台湾新聞の社長であつたりしたので、私は鬼一のすすめにより花蓮港行きを志した、「そこに俳句雑誌『うしほ』といふのがあり、俳句の方では山本孕江が主宰する『ゆうかり』といふのが(ホトトギス系)あつたけれど、花蓮港の『うしほ』の作品には遠く及ばぬものがあつた。特に鬼一に紹介された齋藤東柯の句の如きは全国的にも卓抜したものであつた」(「回顧三十年」)。

東柯はみどりの指導にあたり、いつもみどりのことを慮っていた。『雲母』第15巻〈昭和4年〉第3号「近況抄」に、「花蓮港より」と題して、

美鳥女史、相変わらず熱心に作句してみます。近来兎角、健康すぐれず、宿痾の昂進を惧れて居ります。誠に悲痛な作句精進であります。

先生を一度台湾に御迎えしたいと皆々申し合つて居ります。美鳥女も生ある内に一度御目にかからねば……と、そのみ憧憬れて居ります。梅白君も何とかして先生を御迎えたいと云ひ続けて居ります。御奮発を願へれば、一同のよろこび幾ばかりか計り知られませぬ。

寒中、ますます御自愛のほど祈り上げます。

或る秋の一日郊外の草生に  
句作中の美鳥女を見出す

秋草の莫産に捨てられたまひしか(一月廿二日)とあり、そこにはみどりへの師としての溢れるばかりの愛情がみてとれる。

したがって、みどりは東柯逝去を歎き、「東柯氏追悼 一句」として、

而ふして一七日や雲の峰  
と歌い(『雲母』第18巻〈昭和7年〉第11号)、「東柯七周忌」には、

檳榔に初花つけぬ忌日来る  
と作るのである(『雲母』第24巻〈昭和13年〉第10



号)。

その東柯の人柄と実力の程は、飯田蛇笏がその遺稿集の序に寄せた文章でわかる。蛇笏は、「今、たまたまその中の一冊〈『うしほ』のこと—引用者註〉(大正十年四月発行)を繕いてみるとしても、

冬帽に隠者出あるく日和かな	東柯
芹つむや山霧に笠うち伏せて	同
髪梳くや冬日に耳環ふるはせて	同
春飯 <small>つんぷん</small> や紅臘潰ゆる日もすから	同

の如き作句を見出すことが出来る。君が作歌として光ってゐたといふことは、もちろん其の制作的吟味に於て芸術的に高く位置するものを肯定せしめられる処あるがために相違ないが、さてその作が内容的に特色をどこに持ち、芸術価値をどこに荷ふかといふと、如上四つの作句に就て観ても瞭らかであるやうに第一にの隠逸的な風格である。第二に事象に対して働らきかける心の柔らかさである。即ち、鮮かな感受性を認め得られると同時にそれが極く素直な動向を看取せしめられる処のものである」、「此の隠逸なる俳人のたどりゆく途には、彼の歌人良寛がちらちらしたのもことわりであった。前掲作句中、

芋の葉にいたはりつつみ崖清水 東柯  
の如きは、君詠ずるところの『秋扉とめがねとほんに己がのや』といふやうな、むき出しなとつて付けた良寛張りの制作より、精一杯に自家葉籠中のものとしたものが湛へられてある」と静かに讃えるのである(「東柯句集序」、『雲母』第19巻〈昭和8年〉第2号)。

東柯の句碑は迷子のものと花蓮港の本願寺に建てられたのである。花蓮港の俳人が「花蓮港本願寺に齋藤東柯、深堀迷子の句碑を建て除幕式に参列。二首」として、

読経に秋の夕影おとろへず	中島田夫
香煙に蕃山赫と夕映えぬ	同

とあるものの(『雲母』第20巻〈昭和9年〉第11号)、

みどりが詠った句は残されていない。なお「後記」によれば、ここにはみどりの句碑も生涯によって彫り加えられたという(163頁)。未見である。

#### (5) 太魯閣溪谷を歌う

梅白は、みどりの東部台湾独特の句と病床吟をあげ、その特長としている。後者は前稿でも述べたので、ここでは前者について記す。

その東部台湾の中央に位置している花蓮県は、全島のなかで開発が最も遅れた地である。元来は海岸一帯にまでアミ族が居住しており、漢族が入植したのはようやく1870年代—清朝の末期、光緒年間の初期のことであった。清朝時代を通じて、花蓮県の地は南方の台東支庁に属し、日本の統治時代に及んでもはじめ台東庁に属し、明治32年(1899)に分離して花蓮港庁が設けられたのである。これより次第に発展し、ことに太魯閣溪谷が開発されると、絶好の観光地として紹介されていったのである(山口修『台湾の歴史散歩』山川出版社、平成3年〈1991〉、176頁)。

太魯閣は大理石の断崖が切り立った峡谷が20kmも続き、この一帯は92000haにわたって国家公园に指定されている【図版8】。

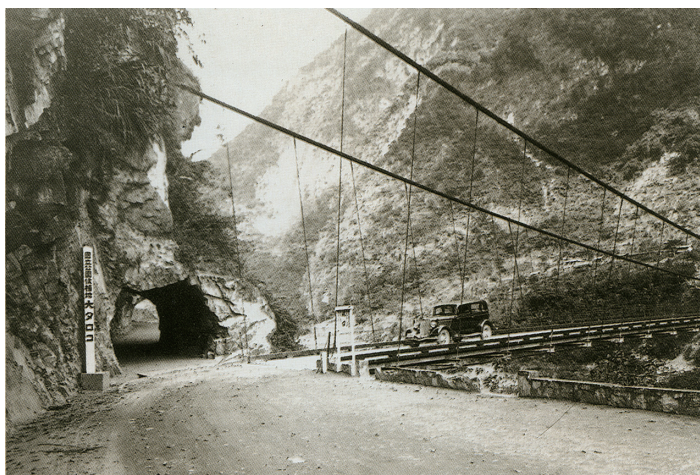
当時、台北市から行く場合は基隆より海上航路で花蓮港に向つたのである。そのころの状況を、みどりも「当地また船が五日ほど通ひませぬ。冬の荒波が去って、やうやく温暖になりますと南に呂宗、東に石垣島を控えて外洋に開いて居ります。当地はまた低気圧でせめられます。只今もひどい潮鳴りがして居りますから、まだまだ船の出入の予測は出来ません」と記している(『雲母』第14巻〈昭和3年〉第7号、「近況抄」)。

昭和8年(1933)、みどりは花蓮港から台北まで陸路を出かけた。そのときの句に、「台北出向の途次世界に名だたる断崖道を自動車にて踰ゆ」と題して、



【図版8】太魯閣の景観、松本暁美+謝森展『台湾懷舊』（創意力文化事業公司、中華民國79年）44-45頁より転載。副題に「1895-1945 絵はがきが語る50年」とある。なお、中華民國79年は1990年にあたる。

- 太魯閣峡谷位居東西橫貫公路主線東段，為台灣八景之一，太魯閣源自山地話「山巒綿互」之意，立霧溪上游一帶綿延28公里長的溪谷，兩側聳立奇岩絕壁，谷底迂迴曲折，山容水態豪邁壯闊，虹彩般的吊橋和匹練般的瀑布散落其間，雲霧朝夕變幻，風貌千變萬化，堪稱造物主的傑作。（同書の解説）
- タロコ峡谷は東西橫貫道路の東端にあり、台灣八景の一つ。タロコは蕃語では「つらなる山の峯」の意味。タツキリ（立霧）溪上流一帶の溪谷28キロの長さにわたっている。その間は大石の奇岩絶壁が塀のように立ちならび、目もくらむような深い溪谷を流れる激流は、岩を噛んで、曲折し、見上げればはるかな山あいよりごうごうと落ちる白糸の滝、虹のような吊り橋など、日本では絶対に見られない壮大な秘境である。（同書の解説）

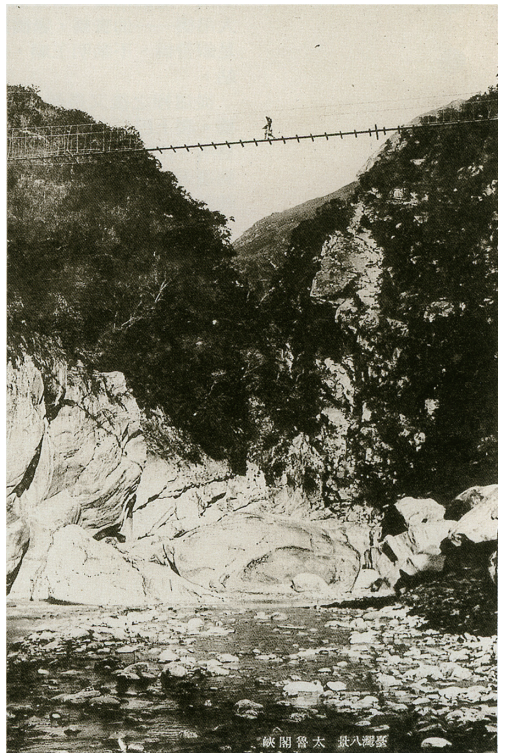


太魯閣口由峽壁開鑿而成，極富岩嶂之美。タロコの入口は大自然と人間の力がつくり上げたトンネルから……。 (同書の解説)





懸崖陡峭の大断崖。  
バタガン大断崖（タロコ）（同書の解説）



太魯閣呂橋。（攝於1930年左右）  
鉄線を使用した吊り橋（タロコ）  
（同書の解説）

羊腸の絶壁みちや灘の春  
黒潮や鳥曇りする沖のかた

とある(『雲母』第19巻〈昭和8年〉第10号)。

現在は昭和55年(1980)に北廻り鉄路が開通し<sup>(9)</sup>、蘇澳から海岸線を走る蘇花公路もあり、航空路にも定期便が就航している。

みどりは「タロコ峡谷」という紀行文を句とともに寄せている(『雲母』第23巻〈昭和12年〉第2号、57頁)。書き出しは「今より十年前台湾日々新報八景募集の事あり。当時同記者たりし齋藤東柯氏直ちにタロコの絶勝を建議し、庁下官民一致の投票応募に力をつくさる。幸に当選、それよりタロコの名声漸く挙り近年国立公園候補地に推さる」で始まり、「景は明眉と云ふたぐひに非らず。奇勝絶景とも云ふべきか、六千、七千、一万尺級の高山系を縦に割つたるが如き峡谷! 全く立体的風景なり。その中腹に探勝路あつて岨極まるどころ鉄線橋となり対岸に再び極まつて橋となり左岸に帰る。全山暗紫色の崖直立し足下三千尺仰いで絶壁五千尺! 云ふところ決して誇大に非ず、探者ただ偉大雄壯を叫ぶのみ」という説明があって、「東柯氏逝いて茲に五年道の改索成りしを聞き、歩行不能の身も輜によりて到るを得亡師の先見瞑すべきを想ふて帰る」で閉じられ、9句が掲載されている。

金山の水の濁りや秋の溪  
むらさきのタロコ岩間の花木権  
さむざむと秋の日なかの籠渡し  
峡路は巨岩かげの葦の花  
波型をなす岩壁や水の秋  
秋の山ここに逼ばかり橋懸かる  
懸橋のそびらは秋の山かづら  
絶壁は窓を囲めり瀧見茶屋  
峡口の空は高まり秋の海

なお、冒頭の「今より十年前台湾日々新報八景」に関して、みどりの句が残っている(『雲母』第14

巻〈昭和3年〉第5号)。

ふりかむる櫟落葉の切通し

また、よしたかには「秋風の窓」(『台湾時報』昭和14年10月号)という「東台湾旅の回想」という沁々とした一文がある。みどりが鬼籍に入った年のものである。この紹介は次の機会にしたい。

#### (6) 飯田蛇笏の評

第(3)節の江頭梅白の追悼文によると、みどりは「それ丈俳句道にたいする精進振りは他の追従を許さぬ真剣そのもので一年足らずの修業にて雲母誌の冠頭をかち得た」ことがあり、また永住の地と定めた花蓮港を離れ、台東に赴くころに「雲母十二月号に於て女史の入選句に対し白露に金剛の光を感じ、生を悠久の自然風物に仮託して日々を続ける境涯の作家であるとの激賞を蛇笏先生より受けし事」があった。この2点について確認していきたい。

まず「冠頭」の句とは、『雲母』昭和3年9月号に掲載された5句である【図版9・10】。

丘陵や指をさし合う三日の月  
粉な虫をまことや粘けし小町草  
病床、一句  
枕辺や百合に蜂笛起りたる  
中華人葬列に逢ふ、二句  
炎天や枢にかけてよき毛布  
裸男の捧ぐ青天白日旗

次に「境涯の作家」と認められたときの句は、『雲母』第24巻〈昭和13年〉第12号に掲載の5句である【図版11・12】。

原野展び秋の流水そこはかと  
一と畠芭蕉不作の色を帯ぶ  
ビルマネム咲き陋屋の家鴨の子  
戦死者の童貞は悲し 二句  
君がため秋白日の香桂かむ  
白日に照る白木槿清しとも









この後者について、蛇笏は「批判鑑賞の余言」にその5句を挙げ長文の評を寄せている（『雲母』第24巻第12号、134-136頁）。以下、採録する。

\*                    \*                    \*

この作者が、いくぶん沈滞の気味で歳月を過ごして来たことは久しい。しかし、君の俳句に於ける恒心は断絶することのなかつたのも亦事実である。こんなことを此処に発表してはいささか礼を失するのきらひなきにしも非ずかとも思ふのだが全く歩行することの出来ない不自由な身体の持主である美鳥女君一だといふことを訊いている。一途ひたすらに念願するところのものは俳句道によつて人生の光明に与り、芭蕉の所謂、「造花にしたがひて四時を友とす、見る処花にあらずといふ事なし、思ふ処月に非ずといふ事なし。思ひ花にあらざる時は夷狄にひとし、心花にあらざる時は鳥獸に類す。夷狄を出で鳥獸をはなれて造花にしたがひ造化にかへれとなり」の信条にたつて、白露に金剛の光を感じ、生を悠久の自然風物に仮託して日々をつづけつつある境涯の作家である。永く台湾の地に居住してをられるのであるが、君が幸福なことには、つれそふ秋人君が深く芸術を理解し、歌人として又俳句作家として常に美鳥女君の心を温石の如くあたたむるに毫も欠けることが無いやうに見うけられることである。彼の病弱な筑波の詩人横瀬夜雨の詩は、霜枯れて叢に鳴く秋の虫のやうに縷々たる物悲しい韻きが生涯を通じて韻きつづけたことであつたが、その幽韻を裏付けて常に温みある陰影が横はつて見えてゐたのは多喜女氏の存在である。夜雨亡き後、現に多喜女氏は女流随筆家の一方の顕著なる存在として、その燠ぶし銀のやうな優に雅味を含む文章を偶々発表してをる。僕など、今の女流随筆家の中で人気ある誰彼をおいても此の多喜女氏の随筆を最もよるこぶものの一人である。それはそれとしておいて、其の一对の関係を逆に酷似せしめるのが美鳥女君

夫妻である。云ふまでもないことであるけれども、世はさまざまである。金殿玉楼に安泰と見える生活をつづける者必ずしも幸福ならず、雨露風雪をしのぐに足りないやうな境界に在る生活者と雖も、それが必ずしも常に不幸を感じつづける生活域にあるものだとは決して云へない。況んや美鳥女君等の如く意気投合、常住坐臥ともに詩を謳歌し詩を味ひつつ之に縋つて、満たされたる詩生活をたゆみなく継続し得る人生といふものは、路傍の石の如く矢鱈そこらに転がつてゐるものではないのである、さういへるほど尊いものでなければならぬと思ふ。いづくんぞ歩行の不自由さを啣つての要あらんやである。

美鳥女君に就いていささか感傷の筆を呵し過ぎたかと思ふ。さて作品であるが、かつて「丘陵の三日月」を詠じ、天稟の才を發揮し此方をして期待せしむるところ頗る多かつた美鳥女君が其の後の沈滞は何としても淋しいことであつたが、今、盛り返へした此等の含蓄豊饒なる作品に打ち当るに及んで全く暗雲一時に去るの思ひである。

原野展び秋の流水そこはかと

なんと其の詩性の旺盛したものであるか。而も飽くまで燠ぶされ鎮まつた感激は、こころよい滑らかなるリズムに乗つて斯の詩境独特の香味を放射するのである。事変下戦死者の童貞に深い心遣りをもつこの作家は又、

君がため秋白日の香炷かむ

と詠つてゐる。この心境には詩人としてのかぎりない同情と、実におほらかなる明月のやうな詩的純情の慈悲がある。

\*                    \*                    \*

蛇笏は「冠頭」の句の「丘陵の三日月」については、「青天白日旗」の句とともに「美鳥女さんは、漸くこの第十四巻に及んで天分を發揮してきた」と評価したほどであつた（「二百号をむかへて雑詠欄を顧みる（七）」『雲母』第19巻〈昭和8年〉第

4号)。しかし、その後は「いくぶん沈滞の気味」の歳月があったのである。すなわち、私が目睹した昭和7年(第18巻)、同9年(第20巻)、同10年(第21巻)には選句されたものも、その句数はごくわずかである。

そのおおよそ十年にわたる沈滞を打ち破った精進ぶりに、蛇笏は芭蕉の『笈の小文』の序をもって讃え、「境涯の作家」の句と激賞するのである【図版12】。それはみどりの死の4ヵ月ほど前のことであった。

みどりの句について、よしたかは「彼女は語彙が狭少で、彼女もまた語彙を歌の方に求めるといった傾きがあつた」と厳しく評しているが、「病中句を唯一の慰めとし、生きるはりあいひとしてゐる彼女のことであるから、私は出来る限りこれを励まし、力づけて盡くの作品に目を通し批評をして相談に乗るやうにしてみた」とある(「後記」160頁)。みどりも初心者から出発し、一年を経ずして「冠頭」を得たものの、当然のことながら句作の難しさに苦しみ苛まれ、それを乗り越えることに多大な時間を要したことを思えば、みどりにとって句を詠むことはまさに生きる力の源泉であったといえる。

一方、よしたかは東柯や蛇笏にみどりとともにあることを称揚されるものの、当時自らは「かうして世間的ならざる、二人の同棲にたいしては相当批難嘲笑もあつたのであるが、今日にして思へば私の側を言へば文学的情熱にかられた一種のヒロイズムであつたらう」(「後記」156頁)と振り返り、後年には「然し、私は苦悩した。精神と肉体の相剋に悩んだ」(「回顧三十年」)と素直に述懐する。よしたかの言はまさにその通りであろう。

蛇笏は、みどりの心境を「詩人としてのかぎらない同情と、実におほらかなる名月のやうな詩的純情の慈悲がある」と評した。私は、この言葉はそのままよしたかにあてはめたいと考える。すな

わち、よしたかはみどりに「詩人としてのかぎらない同情」と「実におほらかなる詩的純情の慈悲」をもって接し、みどりの後半生をともに生きたのである。

## おわりに

本稿は、渡辺よしたかの台湾時代のうち、岩満千恵のその後と渡辺みどりの句作の歩みを資料をもって追ってきた。歌において千恵がその才能を開花させ、夫との円満な家庭を築き得たこと、みどりは蛇笏をして「境涯の作家」と言わしめたことは、よしたかにとって本望であつたらう。

次稿は、よしたかの台湾時代の続編として、よしたかが進展する戦時体制の中で戦争をどのように詠んでいったのか、検証していきたい。

## 註

- (1) 私は前稿において、みどりのことを「青柳みどり」と表記してきたが、「青柳」姓は嫁ぎ先のものである。みどりは青柳家から離婚してよしたかの許に來たのであるから、「青柳みどり」ではない。また、よしたかはみどりと「同棲」したと記すのであるから、籍は入れなかったと思われる。したがって、旧姓に復して「吉田みどり」というのが正確であろう。しかし、よしたかは『あぢさゐ』誌上において、「渡辺みどり」と称することを認めていたので、本稿においては以後そのように呼んでいきたい。
- (2) 明治31年、大分県下毛郡大幡村大悟法に生まれ、大正12年1月、「創作社」に遊びに行き牧水先生の手伝ひをしてゐるうちにそのまま居つてしまひ、ずつと先生の助手を勤め、先生の没後は『牧水全集』の編集をやるやうなことになつてしまつたのだ」と語る(「自分を語る」(その十一)『創作』昭和6年3月号)。
- (3) 千恵が「某子爵の息女」であることは確認でき





い呻きが発せられた。今も尚、今後も尚永久になやみ続けられるのであろう。それが言ふまでもなく人間生活に於ける暗闇であると同時に、又暗闇に反映すると爐火の如き明るい花であるに違ひない。人間は、この花をつまみ、この花の蜜を啜ることによつてのみ生き得るものがある事実を示すとしたならば、その場合が当然詩生活としての一場面を物語る、さういつた問題であるだけに、心へ沁み込む間際々々の微妙な鍵が、他にも与へられてあると同時に僕にも亦与へられてゐなければならぬ筈である。これに於ける意識は、決して僕をして先覚者ぶつたり先輩ぶつたりするが如き左様なくだらぬ生マやさしいものではない。まさしく、文学意識にとつぷりとはまり込んだ、一つの固い信念に燃えゆるところはあればとても、偽りなく謙虚なる文学の使徒としての歩ゆみそのものである外何物でもないのである。

身をもつて当り、氣息奄々たる途上、暴逆無礼を極むる匪徒が若し少しでも眼にとまる場合は、こときれんとする息を吐いてでもその暴逆を正さうとする、純なる使命を誰もが感ずるであらう。僕も亦それに殉ずるものである。

\*

\*

そして具体的な批判鑑賞が始まるのである。

〔付記1〕 渡辺よしたか氏の夫人・次子氏が平成21年(2009)12月17日に逝去された。享年95歳。茲に謹んでご冥福をお祈りしたい。なお、二女・中島しぐれ氏によると、この12月17日はよしたか氏が誤飲という事故に遭われた日と奇しくもかさなる、とのことである。

〔付記2〕 今回の台湾の調査は、平成21年12月21日～24日の間に行った。前回と同様に東呉大学兼任講師・呉欣芳氏に大変お世話になった。心より御礼申し上げる。氏のご助力をいただきながら、よしたかとみどりが台北で編集・発行した『婦人と家庭』を探索したものの、発見することはできなかった(但し、それ以前の吉川精馬や田淵武吉が編集したものは、国立中央図書館台湾分館にある)。

また、みどりが編集した『うしほ』も発見できなかった。これもみどりが花蓮港に赴く以前のものは、台湾大学図書館にある。

〔付記3〕 中国文化大学日本語文学系准教授・沈美雪氏には『みどり句集』の複製を賜った。改めて謝意を表しておきたい。氏は俳文学の権威であられる。氏もみどりが編集した『うしほ』はご覧になっていないとのことである。



歌人 渡辺よしたか、の生涯と作品（中）—その1—

*Tanka* Poet Yoshitaka Watanabe : His life and his literary works (Part 2)

NOGUCHI Shuichi

**[key words]**

Taiwan, WATANABE Yoshitaka, IWAMIZU Yae, *Sosaku*, WATANABE Midori, Hualian Port, *Unmo*

